



[DSC09521](#)

「臨床現場の僧侶」による講演会が開催された。8月25日、浜松市鴨江アートセンター。主催は、NPO 法人楽舎(浜松市天竜区春野町)。

参加者は40名。看護師、介護士、精神科医、ホスピスに関わっていた人、アニマルセラピーの人、お坊さん、インドの人、いま親の介護をしている人、肉親を最近、亡くした人など。

講師は、真宗大谷派の僧侶として、看とり、おくり、遺族のグリーフケア(悲嘆の癒やし)を行う三浦紀夫さん。大阪からきていただいた。

参加者は身をのりだして、我が事として、真剣に聞いておられた。講演が終わっても、三々五々、熱心に語り合っておられた。

現状では、死ぬまでは医者の仕事、死んだ後はお坊さんの仕事。現状は、そんなふうになっている。

大切なのはまさに死にゆく時のケア。しかも、死にゆく時だけではなく、それまでの生き方を傾聴していくことも大切。そして、葬儀や法事をしておしまいではなくて、遺族の心のケアが大切。

そんなに実践を行っているお坊さんは、ほとんどいないが、三浦さんはそれを実践しておられるお坊さんだ。その現場のリアルを語ってもらった。

また、8月27日と8月31日にも、語り合いの場が持たれた。「看とり」「おくり」「供養」をテーマに語り合いが行われた。

看とりとおくりの原点に立って、自由に語りあうことが目的。亡くなった人は、ある程度の期間、この世にいるものなんだろうか。もしも霊界などあるとしたら、それらに対する供養は、可能なんだろうか。じゃあ、どんなことが供養になるのか。お経って、そもそも死者に対して読まれるものなのか。

そもそもお墓って、どんな意味があるの。海洋葬、樹木葬は。遺骨は必要か。あるいは、手元供養として、家の中に供養のモニュメントを置くのはどうだろう。

その他、仏教のこと宗教のこと、霊的なことも含めて、自由なかたらいの場になった。「宗教・宗派を超えた語り合いの場があり、それぞれが自由に思いのために語るという場をつくっていききたい。デスカフェ(自らの死を明るく語る会)の場につなげていきたい」と、NPO法人楽舎の理事長は語った。(連絡先/053-989-11112/080-5412-6370:池谷)

浜松市北部生きがい特派員 池谷 啓



[長野 講座](#)



[カタリバ 看とり - バージョン 2](#)